

## インターンシップのあり方を考える

京都造形芸術大学アートプロデュース学科 4 回生

三重野優希

私は、2016 年 4 月から 8 月の 4 ヶ月間、太陽工業株式会社(以下、太陽工業)でインターンシップを行っていた。そこで得た繋がりをきっかけに、9 月に株式会社マンダム(以下、マンダム)でインターンシップに関する勉強会を行う機会をいただいた。このレポートでは、勉強会の報告を軸に、インターンシップのあり方を学生の視点で考えていきたい。

### (1) インターンシップ勉強会までの経緯

今回、マンダムでインターンシップ勉強会を行うに至ったきっかけとして、太陽工業とマンダムの企業間交流があった。私が太陽工業でインターンシップを行っている間でも、何度かマンダムの方と交流させていただく機会があり、その中で今回の勉強会を実施するに至った。今回の勉強会は、他企業(太陽工業)の事例を題材に、学生、企業、そしてそれを仲介する大学という三者の視点から多角的にインターンシップを捉え、インターンシップとは何かを考える為に行った。当初、マンダムの方からは、学生・企業・大学の三者の視点から 2 時間程で話をしてほしいとの依頼をいただいた。その中で、私がいただいた時間は 45 分だったが、それまで 45 分間のプレゼンテーションなど経験したことがなく、私が一方的に話し続けて興味を持ってもらえる程の技術もないと思った。

そこで、大学の立場として勉強会の依頼を受けていた、アート・コミュニケーション研究センターの岡崎さんに相談をし、企画の趣旨や時間の使い方など、一から考えることになった。普段受けている授業の中でおもしろいものと、おもしろくないものの差は何か、私がおもしろいと思うもの、眠くならないものにはどんな共通点があるのだろうかと考えた結果、出てきた結論は「自分ごととして捉えられる授業」がおもしろい、ということだった。先生が一方的に生徒の顔を見ずに話し続ける授業や、スライドで画像を流し続ける授業よりも、生徒の反応に対応してくれる授業や、ワークを入れている授業の方が、より自分の考えと授業の内容を、近づけて考えられると思ったからである。

その為、今回の勉強会では、一方的に私たちが 2 時間話し続けるのではなく「自分ごと」として今回の勉強会に参加出来るような仕組みを作ることにした。私たちの話と、社員の方の経験の中に似通った部分が見つかれば、より話も入りやすくなると思ったのだ。例えば、今回の勉強会に参加する方々は、社会人であり、「元」学生だ。一方的に、私がインターンシップで学んだことを話すのは、「ある学生の体験談」でしかないが、実際に学生を経験した社員の方々が、一旦学生時代に考えていたことや持っていた感情などを振り返ると、「ある学生の体験談」の中に過去の自分と重なる部分が出来、話が入りやすくなるだろうと考えた。

よって、学生の立場である私の話と、企業の立場である太陽工業の話の間に、「学生」の立場を振り返るワーク(学生時代、企業にどんなイメージを持っていたか、また、就職活動中に企業や採用担当の人と会う時、どんなことを感じ、考えていたかなど、具体的に自分自身の経験

を思い返してもらうもの)、「企業人」として考えを整理するワーク(会社・社員・採用担当の立場からみるインターンシップの意義やメリットは何かを考えるもの)を各々取り入れた。

## (2) 当日の内容

勉強会には10数名の方にご参加いただき、まずは、企業側のワークとプレゼンテーションから行った。太陽工業のプレゼンテーションは、インターンシップの意義やメリットに関して「刺激がある」「学生へ成長の場を提供できる」のふたつが主な話であった。

ひとつ目の「刺激がある」は、学生が社内にいることで、普段とは異なった雰囲気になり、それが刺激であったり、社内の風通しの良さになったりするということだった。学生である私たちが、普段企業で働いている方と接する機会がないように、企業側にとっても学生と接することは多くない機会なのである。「普段接する機会がない者」と触れ合うことは、両者にとって新しい試みとなり、刺激が生まれているのかもしれない。

ふたつ目の「学生へ成長の場を提供できる」について。太陽工業は、学生が何かを学び、成長していく場としてインターンシップを捉えている。採用活動のひとつや企業の広報活動という枠だけにおさまらない、社会的な貢献のひとつである、という話をしてくださった。

私が太陽工業でインターンシップを行っている際、社員の方に就職活動の相談に乗っていただいたことがある。就業後に何時間も話を聞いてくださり、私の考えや感情を引き出してくださった。「なんでここまでしてくれるんだろう...」と疑問だった私に、その方は「自分も若いときに上の世代の人たちに同じようなことをしてもらったけど、その人たちには直接は返せない。次は、自分が若い世代に上からもらったことをしていくことが、返していくこと」だとおっしゃった。「成長の場の提供」も、もらったものを繋げていく過程の中にあるように感じる。インターンシップは単なる広報や採用の一環を超え、人を繋ぎ、学びや成長の機会を提供する活動であり、それは社会的な貢献のひとつとして存在できるものだと感じた。

次いで、学生の視点を振り返るセッションを行った。ワークを通して、社員の方の多くが学生時代に、企業や働くことに対してあまりポジティブなイメージを持っていなかったことは意外であり、少し安心できるものであった。「これからずっとネクタイか...」や「企業の歯車」など、学生時代に働くことに対してマイナスな感情を抱いていたことは、現代の私たち学生の多くが持っている感覚と似ている。それさえ忘れなければ、インターンシップを考える際に、学生にとってどういう意義があり、学生に対して何が必要なのかを考えていけるのではないかと感じた。その後、私が行ったプレゼンテーションでは、学生にとってインターンシップとは「ひとと出会うことである」という話をした。これは、私が経験したふたつのインターンシップ(3年次:直方谷尾美術館、4年次:太陽工業)で学んだ体験をもとに、そこで出会った人との関わりの中で起きた考え方の変化などが、今にどう影響しているかが主な内容だった。

## (3) マンダム社員の方からの感想

勉強会を終え、後日マンダムの社員の方々から当日の感想をいただいた。ここでは、その感想の中でも、私が特に考えさせられた箇所をいくつか抜粋し、勉強会当日に話した、私のインターンシップでの経験と照らし合せながら考えを述べていく。

(印象に残ったのは)「インターンシップとは人に出会うためにあるものだ」という「人との出会い」「ご縁」でした。そういえば弊社の職種が違う若手メンバーからも「マンドムを最終的に選んだ理由は、採用で関わりがあった人事担当者が良かった」という声を聞いたことがあります。

学生さんにとっては我々社員の働きかけによって会社のイメージが変わる。作業→やりがい。

このふたつは、まさに私がインターンシップで経験したことを現している。太陽工業でインターンシップをしていた頃、本棚の整理という業務を任された。当初、私はそれを雑務だと感じていた。しかし、ある日私がいた部署の室長に「本が詰めすぎで抜きにくい」といわれたことがあった。その時、この業務が本を読む誰かの為に存在することを確認出来た。本棚の先には、その中から本を取る・読む誰かがいて、私が任された業務はその誰かの為に在るのだと思うとやる気が出た。それが、今任されている業務に責任を持つことだとも感じた。

本棚の整理をする傍ら、太陽工業の方々には、様々なことを勉強する機会をいただいた。私が出来た業務がこの本棚ならば、その本棚に責任を持ち、それを全うして終えようと思えたことで、責任が持てたのだ。またそれは、インターンシップでお世話になった太陽工業の方へ、私が出来た恩返しのひとつかもしれないと思った。このように、企業の方と学生とがどう向き合うかは、インターンシップだけでなく、採用活動においても重要なポイントとなっているのだろう。

インターンシップの意義はいろいろとあると思いますので、柔軟に、段階的に、積極的に対応を考えていければ良いと感じました。

三者が共有するイメージが合致し、各々にお役立ちになるものが最適であり、その意味合いではあまり深く考える必要はなく、他者の立場になり、ギブ&テイクではないですが、求めているもの、求められているもの、与えるもの、与えられるものをシンプルに追求していくことが一番大切であると感じました。

私は、3年次に直方谷尾美術館という福岡県にある小さな美術館でインターンシップを行った。ある日、学芸員の方に「海外の美術館が、どんなプログラムを活用して学校と連携を取っているのか調べてほしい」と言われたことがあった。インターンシップの前に行った面談で、英語が得意であることや、授業で美術館の調査をしていることなどを話した為、それに応じて私の業務を考えてくれていた。その後も、私が授業で作品の鑑賞方法のひとつとして対話型鑑賞を学んでいる話をした時は、実際に小学校で行う鑑賞教育のプログラムを企画する業務にも参加させていただくなど、今私が持っているものを活用し、実際の現場(小学校)で活用する方法を考えさせてくれた。

これは、個人に対して柔軟に、そして段階的に対応してくれた一例だと考えられる。だからこそ、私も相手が何を求めているのかを考え、私の持ちうる限りをもってそれに向き合おうと思った。「ある学生」ではなく、「三重野優希」として、何を持ち、何を持っていないのかをみてくれていたからこそ、直方谷尾美術館での活動は、自分を振り返り、そして進展させる機会としてのインターンシップとなった。

マンダムの社員の方の感想にもあったように、シンプルなことが重要なのだと思う。目の前にいる相手と向き合うことを忘れなければ、相手と自分との間で化学反応は起き続けるだろうし、それこそがインターンシップのおもしろいところではないだろうか。採用活動のひとつとして、はなから評価する姿勢で学生と対峙すれば、学生側も評価されることを意識した態度になる。そうではなく、目の前の相手と「個人」同士として向き合うことが、その企業に合っているかどうかをみる機会にもなり、学生と企業のマッチングとして有効な手段になりえるのだ。

**ある外部セミナーでは、インターンシップの目的とは①広報PR、②採用であり、多くの企業が②へシフトしているとお聞きしました。そのようなトレンドの中、太陽工業様および京都造形芸術大学様のお取り組みは、社会への問題提起のように感じました。**

私は、今の大学へ来る前に、他の大学を卒業している。周りが就職活動や、インターンシップへ行き始める中、私も学内で開催された就職活動のセミナーへ参加した。企業の方に会う想定として、「ありがとうございました」という練習をさせられた。私はそこで感じた違和感もあり、就職活動はせずにこの大学へと編入した。その時から、私にとって、就職説明会や採用活動などに対する嫌悪感が拭えなくなった。今思えば、その違和感は「嘘くささ」だったのだと思う。何度も練習した「ありがとうございました」を持って、着たくもない同じようなスーツに身を包み、真っ黒にした髪の毛で、「私は他とは違います」とアピールする学生も、それを受け入れている企業も、どちらに対しても嘘くささを感じていた。そして、私はそれから逃げてしまった。しかし、私はインターンシップを通して、その違和感を少し浄化することが出来た。

それは、太陽工業でインターンシップをしていた時期、上記セミナーの話太陽工業やマンダムの方の前で話した時だった。あの時の体験が「気持ち悪かったです」と話すと、「それは気持ち悪いな」と返ってきた。それまで、「そうは言っても仕方がない」という言葉をよく返されていたので、気持ち悪さをわかってもらえる大人に出会えたことが、まず嬉しかった。しかし、その後「で、どうしたいの？」と言われた。私は当時の体験が気持ち悪く、嘘くささを感じるから遠ざけているところで止まっていたが、その一言が当時の私から抜け出すきっかけとなった。私は、次に進むために新たに考えなければいけなかったのだ。インターンシップでの出会いは、思わぬところでそういった違和感と向き合う機会をくれた。

インターンシップの目的が広報や、採用に絞られることは非常に勿体ないように思う。それは付随する結果であり、インターンシップの目的とは、人と人、新しいものと出会う機会の提供ではないだろうか。学生にとっても、社員の方にとっても新しいものと出会うことで生まれる化学反応は意義があるものだと思う。少なくとも、私はインターンシップに行かず、太陽工

業や直方谷尾美術館の人たちに出会わなければ、未だに働くことや社会に出ることを懸念し続けていたかもしれない。そう考えると、インターンシップでの出会いは学生の未来を左右する経験の場になりうるし、なることを願う。それは、大学や企業の枠組みを超えた、社会貢献的活動であり、教育である。このような事例が増えれば、就職活動のあり方も変化していくと思う。そういった意味では、確かに社会への問題提起といえるだろう。

#### (4) 私の考えるインターンシップとは…

ふたつのインターンシップや、今回の勉強会を介して、インターンシップとは、企業や学生が目の前にいる個人と向き合い、互いに何が相手にとって必要か、自分には何が出来るかを考え、行動していくものであると感じた。それが、両者にとって意義やうまみのあるインターンシップとなる。企業にも学生にもうまみのあるインターンシップが確立することは、学生は、学び成長する機会を得ることであり、企業にとっては学生と関わり、知る機会にもなり得、それは採用に繋がる場合もある。大学側は、そういった学生と企業、両者にうまみのあるものを提供するパイプのようなものだ。そして、それは学生に学びの機会を提供するという大学にとっても意義のあるものとなる。

このように、学生・企業・大学の三者にとって意義のあるインターンシップの確立が出来れば、より多くの学生が、より多くの企業が、新たな者と出会い、刺激を通して、経験し、学び、そして両者とも進展出来る機会が増えることになるのではないだろうか。大学がインターンシップを仲介することの意義は、そういった機会をより多くの学生に提供していくことであると私は考えている。

**自社で行うインターンシップって、何の為にやっているんだろう。目的をもう一度考え直す必要があると思った。**

この感想は、普段出会うことがなかった、学生と社会人が出会うことによって、新しいことを生む可能性を残せたと感じるものだった。今回の勉強会も、インターンシップがなければ巡ってこなかった機会である。誰かに出会うことで、今まで知らなかった世界や、環境、また新しいものへの出会いが続いていく。学生のうちは、学科内や友達、家族、バイト先など、安心するところに身を置きがちだが、少し外に出るだけで、沢山の新しいものと出会い、自分の世界を広げる機会と出会うのだと思う。だからこそ、学生のうちにインターンシップを活用してほしい。企業も学生も、互いに新しいものに出会うことに対して受け身にならず、積極的にその機会を提供・活用していくことで、インターンシップの価値はより個人の人生において重要な機会となるだろう。私は、そういったインターンシップのあり方が増えていくことを願う。また、出会い、考え、学ぶ機会となったインターンシップでの経験を介して、バトンを貰ったような気持ちでもある。私は、これからこのバトンを下の世代へと受け継いでいける人になりたい。